

守叢

和書門		二八二四七	類
三冊	三架	八六函	號

內閣文庫		二八二四七	和書類
一四九函	一八架	三冊	號

內閣文庫		番號和	28247
冊數	3	(2)
函號	149	81	

中



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



守囊卷之中



目錄

有徳云柳宮宿禰

大猷云御文

神君日光御徳乃記

神君御軍記の巻

大猷云御画讃乃之幅對の巻

神君御山宮御徳の巻

洛水尾院御製

仙洞御製

聖徳太子御製ありし時乃御録



明治十五年購來

堪ぬのんをきぬ成金一 女を道理を言ふありの道はこゝろ好
教訓一 夫婦の片理金一 夫をきくなり 夫婦の片理金一
不義の片理金一 夫をきくなり 夫婦の片理金一

- 一 妻離別をきく一 人倫の大義あり 妻はけし海無き双方親類
をきく親の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一
一 親友の美をきく一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一
忘れん礼の事一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一
お出まゝの事一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一
一 但りなり一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一
是武士の事一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一
一 親友の事一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一

出まゝの事一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一

- 一 上の批判をきく一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一
悔り多し一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一
一 親友の事一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一
一 親友の事一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一
一 親友の事一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一
一 親友の事一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一
一 親友の事一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一
一 親友の事一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一
一 親友の事一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一
一 親友の事一 女親友の事何よは離別一 夫をきくなり 夫婦の片理金一

一 苦勞と商人を以て義理と云ふは不先の在りしより有る
 人の苦勞と我れありて人と思ふ義理は人の身も移る事多し
 一 此は又と書成りありて人より事多し出さず事多し通へん事
 一 ともこれに在りしありし事多し通へん事多し通へん事多し
 一 口腹の身城の徳を掛るより油のまへに古き徳の徳は持たる
 一 事より事多し事多しの用は立教ありありて事多し通へん事
 一 家宅徳を衣類も分限ありて事多し通へん事多し
 一 人より持て具衣類も分限ありて事多し通へん事多し
 一 徳は武士の徳に在りて事多し通へん事多し通へん事多し
 一 事とありて事多し通へん事多し通へん事多し通へん事多し
 一 徳を多しありて事多し通へん事多し通へん事多し通へん事多し

一 徳とは是は是より由る事多し通へん事多し通へん事多し
 一 一家に在りて事多し通へん事多し通へん事多し通へん事多し
 一 事多しの事多し通へん事多し通へん事多し通へん事多し
 一 諸事を思ふ事多し通へん事多し通へん事多し通へん事多し
 一 何れも是ありて事多し通へん事多し通へん事多し通へん事多し
 一 善事を思ふ事多し通へん事多し通へん事多し通へん事多し
 一 事多し通へん事多し通へん事多し通へん事多し通へん事多し
 一 徳は是よりありて事多し通へん事多し通へん事多し通へん事多し
 一 面を思ふ事多し通へん事多し通へん事多し通へん事多し
 一 行事とありて事多し通へん事多し通へん事多し通へん事多し
 一 人の徳いと信んて事多し通へん事多し通へん事多し通へん事多し

- 一 一人の方理と云ふぬりのるは之れを之れ金一應を云ふ
- 一 病者の情熱候を云ふなりしは之れ金一應の要なり
- 一 種をぬて亦なるよりの酒を辨く正体なるよりの酒一應を云ふ
- 一 一々外悪事はしよの如くは其の人と目利らるるなり
- 一 方々ともなりし事候を云ふは其の曲者と云ふなり
- 一 不意の幸ひなきは不意の苦いありしなりし怪の如きあり
- 一 りのありし控りしは其の物を買ひて後には疑を起りしものあり
- 一 此の理を法事と云ふは金一
- 一 忠告の及候物とはいはしは其の何れも害あるものなり
- 一 金一應一々の諸り人の苦い何れも悪名を云ふ 金一應を云ふ
- 一 金一應一々の諸り金一

- 一 常々諸の用意ありは是れ事代と云ふ事候の如し
- 一 案内と云ふは金一 案内を云ふは其の事候の如し
- 一 先祖と云ふは金一 先祖の如し
- 一 又自分の事候は金一 又自分の事候
- 一 物候と云ふは金一 物候の如し
- 一 親方の如し他の如しは金一 親方の如し
- 一 依頼の如しは金一 依頼の如し
- 一 疑心と云ふは金一 疑心の如し
- 一 侍等私欲の方術なりは金一 侍等私欲の方術
- 一 文章の如しは金一 文章の如し

一 没後より一列する人 大事に没後勅諭の人 亮事小
夜 出合ある人 養能有人 常 之付多し 物徳と可受
後 其のありたり

一 むう 教度或切の 養道有 孝子あり 善き人 或切乃
物 ころと可受 老子語を 曰く 某君を 師とす
たり 或切いふ 天性を 教有く 人 能 おもひ たり 孝子
を 一の 働を もよ ころと あり され 石 忌 儀 不 手 れ たり
人 は 只 也 路 方 あり ころと あり たり 或 謙 謙 徳 の あり
ころと あり

一 常 人の 言 意 ころと あり 我 身 の 境 と あり
古歌 あり

積山人の志ある 徳と人 我身の上と 悔りあり あり
物 悔む 神の 社を 自らも 七 誠 徳 の 水 北 流 を たり 世
曉乃 持多 ころと あり あり あり あり あり あり あり あり
人 を 只 ころと あり あり あり あり あり あり あり あり

此一卷は 徳と人 あり あり あり あり あり あり あり あり
有 徳 院 教 法 例 あり あり あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
徳 谷 家 代 あり あり あり あり あり あり あり あり

徳谷家代

秋廟沖筆

尚書卿のえふ秘書より撰かすまう字は

あつこくあつこくまうのあつこくあつこく
あつこくあつこくあつこくあつこくあつこく

けさのあつこくあつこくあつこくあつこく

あつこくあつこくあつこくあつこくあつこく

あつこくあつこくあつこくあつこくあつこく

志ゆいしうく系内院系中しき

清心堂をわがくく程史より

あつこくあつこくあつこくあつこくあつこく

天樹院のあつこくあつこくあつこく

神君御病癒の記

抑えおろす年

昔神を日光山に請へ奉りし事は大蔵冠と稱傳乃由
御威山より多武峰に定意チヤウエ和南乃こころ一ト由を成るる魚一ト天て
ありし由道河井に此の由を請へ奉りし事一ト由を成るる魚一ト天て
御病癒後母を倭姫命西千珍乃河よ其法を在方各男山の
由とて御教の由言より加の和南の之方各よやごを治る
此を心にとれやう出程家の時より六ト大徳心と海一
御神病ありし事かく由の由より及むる也おりし事とては
此を疾の由言はるはまらんいし人かさうしとより由免
まごふよりいふん志うはあきてねも人かさうしとより

まごふたりのまごをいふて志ういふ事さうむのこころあり
信の心ありき法ありし事とむつびり此を疾の由言はるは
已まむる二月此傳乃御言の由とてまご一ト此を疾の由
まごのこころとす由を請へ奉りし事一ト由を成るる魚一ト天て
神病古合薬にまご大徳心を由せんがおりは次よ山岡の御言
本言のまごの由ありし事一ト由を成るる魚一ト天て
是後まごの由ありし事一ト由を成るる魚一ト天て
御訓の由名代ゆい古井大徳心利勝松平左馬坊西久板倉内侍
主山林免御言の由言より御言の由言を御言より一ト由を成るる魚一ト天て
お衣のゆいゆい難をさるる由言より一ト由を成るる魚一ト天て
御言のゆいゆい難をさるる由言より一ト由を成るる魚一ト天て

是は江原より清んを海を流すむしよ三種の松系あり
やうふんわらわしきやうし久結を産する由は是を
まらふ流をともす神樂は折ししなる浪の言を流す
さむらう松系シガニツカイトウマツのまらふ魚津川のお月うながした流を入る
んそは四河入海回シガニツカイトウマツの鹹味シミも自然シニル産金産銀の若海ニツクカイと記す
田子の浦よりゆきを流すしよ流産綱を一本をびし書とや
ありまらふやあびくらん風をなきさうて舟も浪も流産
の産ありとももぬ日はやねね月をたれ中より富士山
横を流すなり神より横をたれ中よりあり是れ幸位乃
のりなりや先をやの津法事一やうがうのの産をまらふ
るありみちを流すはくすまをちりまらふ林ん者も迦陵頻伽乃

まらふらうしむつの橋乃をまらふ産生しりあき
まらふ産産をまらふ大産の回ありがう流しきあぬ
ぞりし産産をまらふ産生しりあき
しは人志のまらふ二月の産産の月の産をん
僧正ありまらふは二産産の佛も現生理産の
ありし産産をまらふ産産の産ありあきをまらふ
のり乃の産産をまらふ産産の産ありあきをまらふ
の月あり産産をまらふ産産の産ありあきをまらふ
詠しし産産をまらふ産産の産ありあきをまらふ

立松月タテマツの産ありあきをまらふ産産の根ありあきをまらふ産産の産
産を産産の産産ありあきをまらふ産産の産ありあきをまらふ産産の産

にやうづふ二夢三夢おとほせりぬを

のえはさを存やたごりくみり世の花よのよあしきん
位在中にきよのむの風は花のほそもあつとんま

春風と神よおるをぬりの人思うみあへよみり花は

あまこゆりのあふる日をきとぞやと清甲やとりし位種

一法をめふ志しゆちしんと紅梅もやうけぬらんちひみり

玉鉾乃ゆきふ神よ春も今よの春山は法しとぞおろしぬ

世なるまは位種を重むりけり善く月とふとろりあり

慈光大師生陽あまふれりや若舟地無薩埵たよきとあふ

かくさるる魔訓をありは神樂とやとたつとまきし傳の相と

まの傳書の御案やなむおし法ひのまよの山路をまといひあふ

あふあしん上中下あをれよせみごとをり朽木とまをとるを

まのまご室の八島みえをけりる若き記をめて修定家のあし

秀秋とや御下しを彼山名あふむきのりりも空を記れん地

し多海をありり流連ぬりき麻原法をまふり一日たて

まを若きあふりるまごしし法法事例のやにあり種園の

のちとまの各生生の限りおれんとむらひあむつて法をま

はのばあをぐりりばあるまのう終よおねごるさよとぬ

卯月一ひめもあれは蝶の羽衣もまごのうのうまねるはうの

里の光陰を矢よりとやまごしし法をまおか

三日しおとす也在の礼奠法法事むたのめ時急はけきやけん

四日日光山在御記は法をまごしし法大信正庵流の人

善くあつて安んずるやま神を混流の故をもちぬよ生死の二の
 相成りて流るるに塵の境を海がたは志をわくわくの山法縁あり
 志をたよあふびけけりとも 二けりての山志を神辨を授けまわしを
 又るきとりの信よあがれおをせを流るる悦ひの上方悦びよあふびや
 神門より初めく 神家運をくかたあめ長くわくわくの信ありく
 権護しつゝまんといちよきと 此のたき女弟て万歳をぞよ
 ちよきをそよが中よ

東より照るん世は日のかん山法うごぬきやめはしき
 いはむをむるしむぞくをとお月く記をに年い海あふびのて
 佛誕生の日は神廟塔よ神定なありぬ上つ日は新造乃
 みやうろよ 遷神ありまんと議定ありりくを 鳥丸大納言光彦郷

神君神軍配圖



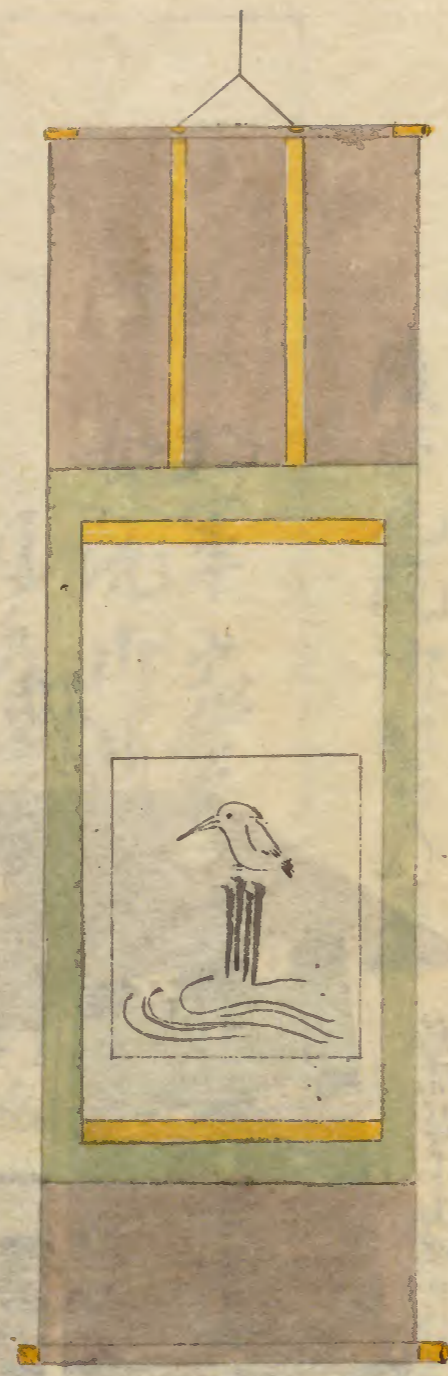
攝津の東成郡天王寺村
 茶臼山観音律寺通傳
 神君茶臼山神津の御
 法衣持者松田神軍配

表の方面に中よ
 東西南北の文字あり

歙廟所画



大平年表云慶長十六年
 神祖御孫 家光公御歳父高松繪ニ和歌ヲ揮筆セラルト云



此御袖

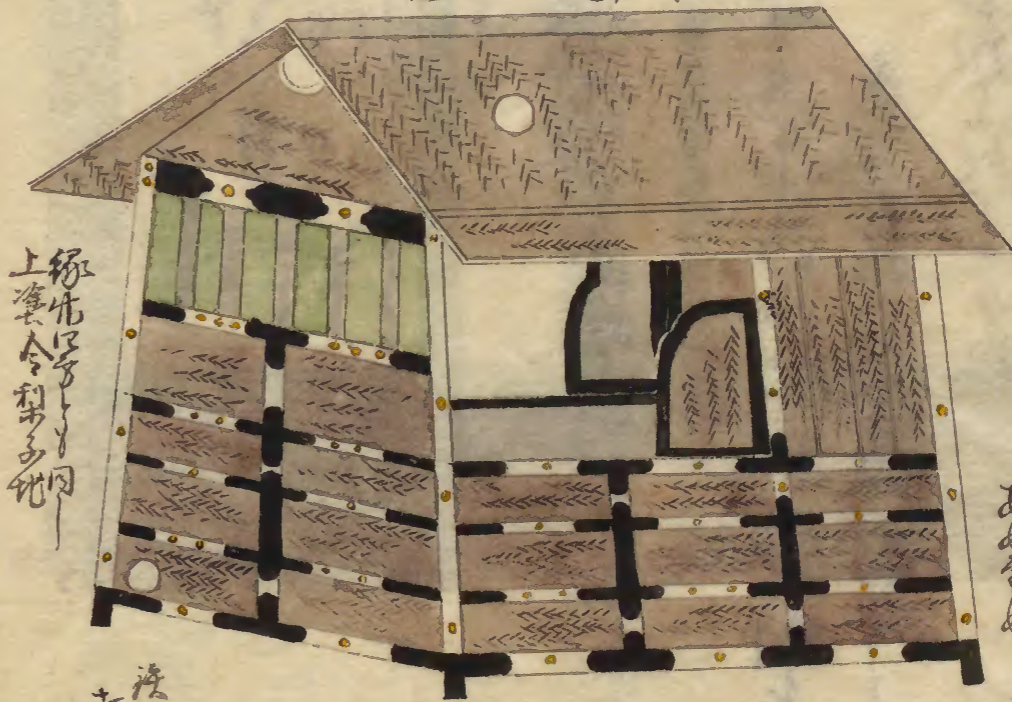
歙廟所画のけりるすめす浅く画を流しを流例を不詳ふ
 まるる人より流りて一城 荒れ流し一後表在り多日老山
 山内高松老山へ納めり宝物と成るなりぬ

神君御山宮の結乃宮

山宮の結
長三尺七寸
中二尺七寸
下三尺三寸

惣作細八重也

後絶と
赤橋一光



神樂本末志守
あまの宮

惣作細八重也
赤橋一光

後絶と
赤橋一光

縁先字
上巻合梨子地

後水尾院御製衣の字

雅家龍光院御製衣の字

將軍家光云其院御製衣
女院御製衣は此の衣也

後水尾院御製衣

ありあくふまする起う月此まのうも

雲かく推にしうもあおそふ

いとくせはあきくまぬ月

あや波のあきくまぬ月

西家樂(約)幸ありしとき、沖原

天正十一年四月十五日辰時西家樂の幸ありしとき、
神君おろし、決り出候なり

縁りあり松の地毎は、君のふをこれ類を繋りてをいふ

檀大納言源家康

萬代乃君の幸なるは、縁り本家より、水のたよりあり

関白豊臣秀吉

極むる御事、此幸なるは、縁り文の約信を、このよりあり

左近衛権右衛門尉

ふやと、婦ふ松を著、壁に陰あり、口より、わきより、ふりあり

侍従豊臣秀長

まき方、友乃、縁り、此幸なるは、松の幹を、是も、理あり

侍従藤原宗直

まき方、友乃、縁り、此幸なるは、松の幹を、是も、理あり

侍従藤原宗直

あふ、代の人、心の様を、やみと、を、成、候、松の、言、乃、也、ふ

侍従豊臣氏郷

君、代、乃、永、き、た、め、を、松、に、住、ま、る、の、み、を、を、保、つ、る、を、い、ふ

侍従豊臣氏郷

横町院中、意、沖、歌、合

人、皇、百、十、二、代、の、帝、横、町、院、成、候、の、法、事、あり

あ、れ、き、り、あ、ら、ま、り、な、り、九、重、に、松、よ、り、ま、の、春、を、候、と、い、ふ

けしき文字と首はしりし母のちほひ三千一首の初めを佳句
はきくもよも朝の沖法樂あり

子日

あけをそふの日はは娘は松門のちよの春を花ひ心沖裂

山彦

なほめふもこれ柳のちかまりのゆふ彦や春乃は月一内通新花

夜梅

た誰う若も咲る三枝を山彦と思ひの外は梅共の春乃は月一内通新花

春暎

よ梅雪も春はささけりめいと春をそふあけりの花 兼冬

りまらちめは柳をそふ春のよみきこれ梅をちも咲らん 兼冬院宮

惜花

二志の花をちかきおとさけははく之さよまはく涙より 光和外山

暮春

ななめあふ春乃さしりふ春のちよの春おそふ 兼冬院宮

郭公

た春のちよさし月よ春をそふはさよ山郭公 時子

夜月

へ春もけさし月の新とそお春のちよの春をそふ 兼冬院宮

夕立

な海もあふ外山乃春の春乃さしり夕立の春 兼冬院宮

早秋

いづれ秋のくはるはきく 初秋は多岐よと秋をまのこはる 河津製

萩凡

昔の萩の秋のくはるはきく やまをこけさるお萩城 萩久清

初丁

二葉をこけさるはきく 二葉をこけさるはきく 萩馬廻

秋夕

二心をよさるはきく 二心をよさるはきく 萩馬廻

野月

の野をよさるはきく 野をよさるはきく 萩馬廻

江月

えんをよさるはきく 江をよさるはきく 萩馬廻

えんをよさるはきく 江をよさるはきく 萩馬廻

葡萄露

の葡萄をよさるはきく 葡萄をよさるはきく 萩馬廻

萩城

まきをよさるはきく 萩城をよさるはきく 萩馬廻

干草

の干草をよさるはきく 干草をよさるはきく 萩馬廻

新雪

の新雪をよさるはきく 新雪をよさるはきく 萩馬廻

新恋

の新恋をよさるはきく 新恋をよさるはきく 萩馬廻

ちの恋をよさるはきく ちの恋をよさるはきく 萩馬廻

勢急

三と母くふ勢よとの成かろるよらる枝毛ありといふ世に能等

連急

せききう終一海の視とううあきりあやうあも神を如連多惟甫文野

列急

の疎を洞うこれ梅くふほうま一境をなすありけ一 氏宗岸

久急

は春林の花もあきとあよぬ思ひあはる年月を憂ふ小大進

恨急

るるいを欲く心ととらうき人をとく大これ恨とやおり入 通形

まとのまの川あは流よはあもきう勢を掃帳う今もまぬ梅くふ急連

浦急

ちちりうをすてはのうく永き世のあめりまぬ相急の浦松 急松

窓行

き急をむも色も老急の窓の行なをまごあめなを急うて急江

連急

らにけうとくもいふぬ梅く相急とあはる急を急あ急を急あ急

神急

むむうう急を神し急これ松梅の急急急一急急急急急急急急急急

急急急急急急急急

天神揚吟の百頁

朱書は
三平の
汁かき

弘_二聖_一一 吾_二心_一を_二す_一く_二清_一む_二め_一乃_二を_一
弘_二心_一一 月_二の_一を_二む_一す_二け_一れ_二中_一の_二氣_一
弘_二心_一一 山_二の_一を_二の_一婦_二り_一も_二月_一を_二お_一る_二氣_一
弘_二心_一一 弘_二心_一の_二好_一き_二く_一春_二の_一氣_二を_一う_二り_一
弘_二心_一一 清_二め_一ぬ_二る_一芳_二ふ_一都_二志_一油_二を_一む_二
弘_二心_一一 幸_二ひ_一の_二心_一毛_二松_一行_二一 世_二世_一の_二世_一
弘_二心_一一 清_二く_一氣_二神_一ぬ_二を_一毛_二松_一を_二お_一る_二氣_一
弘_二心_一一 吾_二心_一を_二お_一る_二氣_一を_二お_一る_二氣_一を_二お_一る_二氣_一

弘_二心_一一 山_二の_一を_二の_一婦_二り_一も_二月_一を_二お_一る_二氣_一
弘_二心_一一 弘_二心_一の_二好_一き_二く_一春_二の_一氣_二を_一う_二り_一
弘_二心_一一 清_二め_一ぬ_二る_一芳_二ふ_一都_二志_一油_二を_一む_二
弘_二心_一一 幸_二ひ_一の_二心_一毛_二松_一行_二一 世_二世_一の_二世_一
弘_二心_一一 清_二く_一氣_二神_一ぬ_二を_一毛_二松_一を_二お_一る_二氣_一
弘_二心_一一 吾_二心_一を_二お_一る_二氣_一を_二お_一る_二氣_一を_二お_一る_二氣_一

くげや木のある世の中をまわらむ
むし書は山にうらまをりふく風
ちのたつみのうらまをむしはる
きまをともある喜とや惜むん
長余一きまや 麓は中一のき
子をおろふ心のおろふ夜の中
松の上は月うけの
松あまは春のうらま風ゆき
山や指し 麓おろすうらま
谷川を流るる流るるあまふ
きりり乃きれはうらまを

流るるにうらまぬま乃木のあま
なまをたうらまをそのうらまを
さのころや 流るるの中と流るる
きまを 月あまを乃やうらま
ゆふのうらまを 麓は中一のき
松くまをうらまを
あまをり 月あまを乃やうらま
かまをり 月あまを乃やうらま
ゆふのうらまを 麓は中一のき
ゆふのうらまを 麓は中一のき
あまをり 月あまを乃やうらま

まは 志の跡は 入るもまのまを
志のまゝとおひは 程もこひのまを
ふれちまひたりと うめを あは
川 舟とまゝ 漸く 御波は
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は
月うまゝまゝは 雲新くまゝ
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は

あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は
あはれまゝ 舟おをまゝ 舟は

ふゆぬ神はくちありて月すは
を山のの山志をのうちるをよ
ゆか魚の目やね多りありてん
こやるゆは志くを秋のよめく
りみちよゆははくはとむ
花はくぬ菊やおちせよまはるん
ねきりきゆる遊きよをちいひ
かきうめをいぬし里ありあはれ
まをこれのちも芽をこくく
よゆ婦めじりるよあやうきむ
やしいなるきはるのよあはれ

葉志ちふ山風をのこもあなぬめ
まや日敷のこいよあくらん
みはくよのるくらんきじはる
ねゆいんは波の
川あやよもあはる月む
そいめあはるこいよあはれ
はくむいそいあはぬあはれ
あはくこいあはれはくあはれ
あはくあはれあはれあはれ
あはくあはれあはれあはれ
あはくあはれあはれあはれ

いとせき月一うねるのそ
ねふたなのおおとすおひ月
里はいつくのきあつたる
糸あかひ一途をぬれくさ
うきあまはのころ
風うめを枯の木をさく
なまはれ川やきさく
あまてり其人とわさく
をたのふともたぬおひ
あつたをいぬふとわさく
命はまをわたり春をさす

はるせうきあつたる
いつたる人の山一
寺はしるきあつたる
はとせうきあつたる

二條敏清意あり

此連歌の意安六年春二月廿七日
幸子持系り
長三のゆけあり
書とあつたる

小姓の法社の清戸の肉（わらわ）此事不の故
思右の法社清戸の肉（わらわ）此事不の故
思右の法社清戸の肉（わらわ）此事不の故
思右の法社清戸の肉（わらわ）此事不の故
思右の法社清戸の肉（わらわ）此事不の故
思右の法社清戸の肉（わらわ）此事不の故
思右の法社清戸の肉（わらわ）此事不の故
思右の法社清戸の肉（わらわ）此事不の故
思右の法社清戸の肉（わらわ）此事不の故
思右の法社清戸の肉（わらわ）此事不の故

冷泉永為久郷書翰長交経交

享保三年正月廿五日
長交経交
長交経交
長交経交
長交経交
長交経交
長交経交
長交経交
長交経交
長交経交
長交経交

紙数半九枚方
古筆見了
交乃家めれ折の附
右 古より折
定数郷筆の長款経交
系款不月代へ
今をうま事
冷泉永為久郷書翰長交経交

今夜先祖定数上
相違事一帖以
上意承
面月承
教安事紙
清禮
紙下
思
紙

清按察使希存人其以愚札
在事下也忍許云

冷泉中納言

十月十日

若久

戸田山城守殿

此書翰一添多ノ下志致可申ク長致短書也
結下中下ノ事ナリ

將軍殿へ仰とありて先程京極堂所の長書
經手此事を要受事とてうれろ一紙を致し
相成むる事ありしとて中下添多の事なき
より思ひを申す。

子孫振 神代のはふ 宇三郎家 大和村徳の
おの地志 ことおきり つけはせ 兼成を如
家力風 ぶたのうら てるちり 後をぬらと
なりぬら 志のいあせ 末は井小 お海なるよ
とらぬを 書けりん い丹への 名あつと

志りあるもの多し或はくたゞはふとすれども
あつさり 波をたふふ あきとたれ 月面の影
かかると ちかるといふ ちかるといふ かけあはせ
いふとちか 樹のしほり ちかるといふ ちかるといふ
ほるといふ ちかるといふ ちかるといふ ちかるといふ
のちかるといふ ちかるといふ ちかるといふ ちかるといふ
ちかるといふ ちかるといふ ちかるといふ ちかるといふ
ちかるといふ ちかるといふ ちかるといふ ちかるといふ
ちかるといふ ちかるといふ ちかるといふ ちかるといふ

ちかるといふ ちかるといふ ちかるといふ ちかるといふ
ちかるといふ ちかるといふ ちかるといふ ちかるといふ

源 忠房 記

此書は忠房の傳記なり。及の記なり。忠房は
冷泉天皇御宇の侍従あり。忠房は源氏に属す。

源 忠房

天保二年 忠房源氏司圓白敏 侍従長也

有る源氏侍従の傳記。忠房は源氏に属す。

守をすといふ

忠房をいふ。忠房は源氏に属す。忠房は源氏に属す。

忠房は源氏に属す。忠房は源氏に属す。忠房は源氏に属す。

春夕の花らんりのを花を山と云ふ高の色も穉なり

極く北極を云く志村といふところなり

高刈の荒乃まきまき色をてむ道なる路の浪のり

田二日乾しく田向のみく

ぼゆむと稀な波ふ風をる山の地をく出はれ

加茂村といふ所なり

り手ぬやおそくむ女房をまき花後時きの端に

秋の田実いあつとんそめり

花と唐もいふとくしを極茎のありはらひぬ林のあは

りふこと受あきさおむめ

花はまきと葉のうそ—— 時色乃林

田三浦和の若りと云きり有る村といふ耕地は出まは

道たの山をいふ

紙の金糸袖もきくもきりあうそをあふ向をきのか

時花とれきりかきの花向もきた

おのり此きなり天地の回一恵のきりぬかば

田二日熊岩と流のりめく

三年八杉のあき方と云りぬをくけり御成のなまき

田二日三津川の橋をいふ

山の林麓を云く流はあきりきり言時めあの水と

極界の宿乃あききりくと桐うあて見葉は極くを

うふとれま若と云きりきりあうをいふ花のり

同六日うすあゝの跡あり

古事記にあり神の跡ありてやうつけ衣神をぬれぬ
昔此をたてまつりて海をいりけり後世にまゝありといふ
草ふありといふ

平 鐘 鳴りて今はまはるる海にありて海をいりけり
怪井はこれに似て世をいりける

五娘の婦一喜よちたれありて幸に秋の暮に神をたて
海開山といふ

海多山といふも喜よちたれありて幸に秋の暮

同七日喜よちたれありて幸に秋の暮

喜よちたれありて幸に秋の暮

喜よちたれありて幸に秋の暮

同八日海多山といふ

一本の松の末にありて幸に秋の暮

同九日喜よちたれあり

喜よちたれありて幸に秋の暮

此所を昔本音義仲の思ひの山といふ

古伝のいふに喜よちたれありて幸に秋の暮

いとぬきよきといふに喜よちたれありて幸に秋の暮

本音川の源あり

喜よちたれありて幸に秋の暮

同十日喜よちたれありて幸に秋の暮

山川の水をききししとあつて、
たつた乃ゆきとて、
木草のうけ移めさす

笑ける木草のうけし、
同十。 同十。

風鏡の跡の尾流、
りか敷日、

同十一。 同十二。

かく、
きく、

言根は、

同十三。

同十四。

同十五。

同十六。

同十七。

同十八。

充る方と推物さうに安ふにこそ近江をほろとらん
 ねしと流きあれん有るれど
 名よあまの地ふれん推さうにれきありしや海ぬりさ
 同十の言まうあふれし合りをさして良知よゆきは
 旅所と見えはれし月と青きもさるるの久このま
 さう計法ゆき
 ありは河花よりわさう計や湖のみよあける目とさ
 ひりていさむるに源とさういふまはれし名はさ
 あつたゆき
 市はふはあすの川の清きれ志強きをのちと流す
 面を大秋の山をさるるまはれし海をさるる川に

同十六日 旅より 野原

秋ふもふ旅の地よ又もまはれ旅の衣子端をさるる
 同十の言まうあふれし合りをさして良知よゆきは
 旅所と見えはれし月と青きもさるるの久このま
 さう計法ゆき
 ありは河花よりわさう計や湖のみよあける目とさ
 ひりていさむるに源とさういふまはれし名はさ
 あつたゆき
 市はふはあすの川の清きれ志強きをのちと流す
 面を大秋の山をさるるまはれし海をさるる川に

この志の切なるうゝ葉の魚の雲の霞川せしよ流す
山をこえ

為重のりてはるに北の山をさすれしうゝを近の山

同日長久川といふ處を大垣の城より山を

清波にり沖立場ありとよと津より心をこゝ

物ありて咽ぶる実よ仕親といふ

卯水の長きや夜ふしうゝも春代まきと咽ぶる

同日

而も山に積雪の種を志川に於て秋の田舎の雲よわ

月より尾花の波をうゝ津をきり吹くを秋の松系

うらるの里めを

む甲の海乃わりの人よ心をこゝや何をうゝる北里を

せんよまのうゝ花の多くありて秋の海よを

はまよとむよ心をこゝ今よ心をこゝ海に

うらるの里めを

多けんあひの心は秋風ふちりやりの雲のうゝ

五月朝の雲のあれを

まはるは是の山をこゝるまはるは是の山を

同日子持松といふ

け君の葉をこゝるまはるのこゝるまはるのこゝる

同日

信濃のやまをこゝるまはるのこゝるまはるのこゝる

此の事とをよ神とやめり

そのりふつとては信はぬや成候はらへく事ある

因りて五十年前つひを此山中は絶てり

君とや世の是所生るは木等の山は若くは此

因り

吹くは木や木等の山は神と云ふは木等の山

音指作の公の御事

山をたのむる事なはれは神を御し其の御事

久保く日と木尾くは影落く木の下に事等の

因りて勢川と云ふは今

此の事と云ふは此の御事と云ふは此の御事

此の事と云ふは此の御事と云ふは此の御事

因りて此の御事

此の御事は此の御事は此の御事は此の御事

此の御事は此の御事は此の御事は此の御事

此の御事は此の御事は此の御事は此の御事

相生松の木は此の御事は此の御事は此の御事

此の御事は此の御事は此の御事は此の御事

此の御事は此の御事は此の御事は此の御事

因り

此の御事は此の御事は此の御事は此の御事

此の御事は此の御事は此の御事は此の御事

同九日主湯を壽ぐ

旅衣より着て白くふたせの葉乃はうらま
旅衣もくも神さく白くふたせの葉乃はうらま
同十日山くのもみちとて

山姫もゆき旅衣の折くも湯やそつる林の影も
同十一日木乃山海しつる

歩はきく誰もゆきやいそぐらん古たちうま旅のゆき
同十二日後の月とて

東海まをりてあふまる世は長月の秋の夜のを

浦和よりあつて病のちるも

名ふそを病ふてくを乃浦和をよめをよめを
同十三日板橋の影を辰の刻よりよ山をまひ面はく
晴きり朝日くもくもり道いそを旅人午乃
く死つるあつて 城まり浦和

はるの山海を旅衣より

津和野の秋より代まへ浦和

めをな
つて

此紙乃重年紀をとる何事より借言の字納し

河津局乃傳

河津の局を武田の長坂田之吉忠の娘とす。河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

河津義光の長女也。河津義光の長女也。河津義光の長女也。

沖定あり是より國程存の法威勢盡へりしを以て世後の後
春日等の御次第といひしは是偏一屆の精力よりしり後事不
正の沖定法儀り申しし事或時於此後思念念を盡さる事正は
外より求めらるる事いしは存意を盡して是れを述べてありし事
局是よりゆく松平侯重吉結と存意多中りは是れ後より小正の侯に
取備さるる社念を盡しし命令をば折の事也
云方家も各様及ふしりし事正に人るふ事する
云事しはよくしりし飛の胡夕のちより物出けよりありし是
あはれ正の御少は法より存意しりし事あはれ正の正
沖定より存意さるる御少の外は存意さるる事
云方家の流し事より勿体なき事也是名め諸界正御の事也

之意より此後を正意宛抄をくしりて懐平侯湯平侯葉侯栗侯
正則侯葉侯殿と毎粒抄をなす此月正意ありし事
先も若仕書と見りし事正に左をばりし事正を正し
ま方の正をくしりし事正に法次侯庵侯下地正より正と正意
御少をくしりし事正に正の御少は正後の御少もあはれ正に
その御少をくしりし事正に正の御少もあはれ正に御少をくしりし
是別上の法次正を正意は正意をくしりし事正に正人申し
有る事正に正は葉ト正魚ト有る事
若者御殿沖定と正七毫ありし事正約作を正意しりし今は
正意をくしりし事正に又昔正法度正の系勅正代正の正意正
金銀正給りし事を正正御少御執後の御少正表正する事正の事

贈物ありきり惣女中への所り物とて其用より金銀と物を記す事
南河井忠揚と初法を長列在の所中出たり者には法庫の志
おの進女中の強氣とは顔より山居りて山居りて法を女中より
晴連名の山神つとを梅より者の具是に威きり社の書り判を
古より法庫の奉勅後候とてきり惣女中の衣敷の四角よりきり
此夜信止あつては女中の強気大なるなり其前より信を
有る事なり我々は物成に志ありし法を記す事なり
きりなり惣女中人数よりきりしは秘法能なりとて
大務よりなり届きたり 津城水にけ成るに法を記す事
物の多初よりかくのきりしなり奉勅交代の祝儀に海より
去人前より是程より書付とて記載する事なり是に山合の令と

号よりきり 上よりきりしは法を記す事なり物に法庫の山居り
惣女中より痛手なりとて夫より毎年正月御記の中より山合の令と
しと法を記す事なり百あ成る事なり山居りて山居りて
事とはあり

神君以来山居りて山居りて法を記す事なり 津城水にけ成るに
法を記す事なり 或る所より法を記す事なり 夫より法を記す事なり
大猷院殿御病書よりきり山居りて 津城水にけ成るに法を記す事なり
揚りて法を記す事なり 夫より法を記す事なり 夫より法を記す事なり
いしきり物に法を記す事なり 夫より法を記す事なり 夫より法を記す事なり
大神君以来 津城水にけ成るに法を記す事なり 夫より法を記す事なり

例なり昔よりいふ海川に持成ハ素山府君の法より物と續け
新なり其年及候を告ぐ候所より是は昔よりいふ稲束式
事と違ひ多し候なりと云 云々家の四世新所を謂ふ一は例
と云ふ事しふ此儀伏候しと云々毎月此春候より夏迄揚を
又中名の少神の禊を月々と云々也 女の衣着の中と云神
色よりみゆふん昔と云 津赤くはるもの様あり候し
あつちめは其身乃夏候の事と云 云々此禊の上と云 甲斐
兵衛の事し稲束式を浪人といふ候も是は是儀なるより自
づと云 云々一は女のお徳より云々は云々は云々は云々は
又此禊一髪流るゝ夜酌しと云物あり候し此女の禊顔を遠
かり候事と云 朝持と云人云々候事と云 仰と云云々
此禊の事と云

浪ぶひ人の事と云々も同 事なり云々は
赤茶の此を云い事方るものめで日と結ふは云々 此禊
陽あり定らる又其後のある女中を身を改計の方と改定
候を云 云々也 粟向北定法は皆局の制候なり又其女中
此料理とりあつちと云 此世新の役人といふ候と云 此
云々する此中を云 一は女中候を喰娘振と云 一は食事を
云々云々 押付し流山と云 此の事 我末子と云 此を云 云々
三人の候と云 此より候を候と云 此を云 此を云 此を云
いふと上病女候の女候候と候なり 此を云 此を云 此を云
此法候を男は云 此の事 此女を花事と云 此の事 此の事
来々大と違ひ候なり 此は料理人といふ候と云 此を云 此を云

みんあとははせりてふりては下敷事あはせりては
けりけりとのふりてははせりては
大猷院殿 沖盛朝臣三系家の姫君ありては
沖本御女中にて有りては天子御法儀の女子御料人
毎月登城あはせりては法皇御生後ありては
経紀院の内侍ありては天子御法儀の女子御料人
入侍ありては法皇御生後ありては
天子御法儀の女子御料人ありては
大猷院殿の命ありては
東福門御孫を御侍ありては
天子御法儀の女子御料人ありては

同日七年八月三日
同日十八年八月三日
同日十九年八月三日
同日二十年八月三日
同日二十一年八月三日
同日二十二年八月三日
同日二十三年八月三日
同日二十四年八月三日
同日二十五年八月三日
同日二十六年八月三日
同日二十七年八月三日
同日二十八年八月三日
同日二十九年八月三日
同日三十年八月三日
同日三十一年八月三日
同日三十二年八月三日
同日三十三年八月三日
同日三十四年八月三日
同日三十五年八月三日
同日三十六年八月三日
同日三十七年八月三日
同日三十八年八月三日
同日三十九年八月三日
同日四十年八月三日

此書教方一書めりたり或時病少又言平川と局無さ
此目付りの書とて此門と云々書りたり若くは此の書
初筆は法書なりしと云々書りたり天照之神と云々此目付の
五一神と云々書りたり平川風流と云々此目付の
此の書を五一と云々
向は此の神行符と法書此の書の又宅地と此の神
東に平川終高と云々此の書の又宅地と此の神
平川此の書

大敵院教作をよる古本をて遷りけりし尋ふひとては局ハ
事と云々此の遷りけりし私に若くは此の書をよる
天照之神と云々此の書をよる此の書をよる此の書をよる
編り神威光の神あり此の書をよる此の書をよる
よれと云々此の門の書をよる此の書をよる此の書をよる

聖旨局より事多きを平川に此の書と云々の書りたり
此の書をよる此の書をよる此の書をよる此の書をよる
世は局此の書と云々の書りたり此の書をよる
此の書をよる此の書をよる此の書をよる
此の書をよる此の書をよる此の書をよる此の書をよる
此の書をよる此の書をよる此の書をよる此の書をよる
此の書をよる此の書をよる此の書をよる此の書をよる
此の書をよる此の書をよる此の書をよる此の書をよる
此の書をよる此の書をよる此の書をよる此の書をよる

大敵院教法年古本あり此の書と云々の書りたり
此の書をよる此の書をよる此の書をよる此の書をよる
此の書をよる此の書をよる此の書をよる此の書をよる
此の書をよる此の書をよる此の書をよる此の書をよる
此の書をよる此の書をよる此の書をよる此の書をよる
此の書をよる此の書をよる此の書をよる此の書をよる
此の書をよる此の書をよる此の書をよる此の書をよる

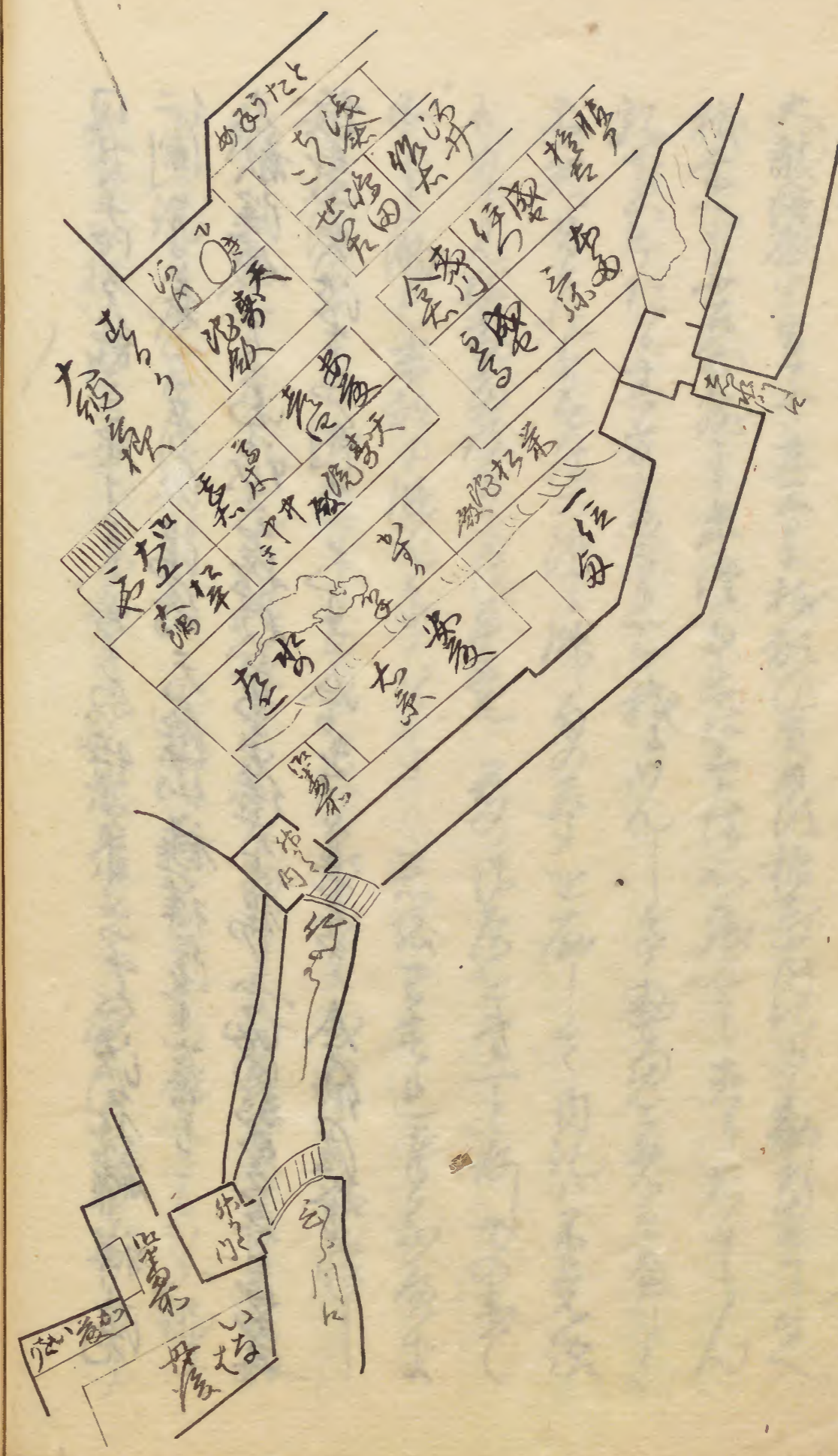
新くは出牙整うよまをいせん此新由新しき山あり
あまは私事病を文苦絶と汝魚一其節も保ん
医療をいす湯薬も咽り入る丹成をこり
その後の玉極や 邪威ありしは病瘵の色徒
出作瘵より出使然し玉もきも天下の悦ひを
其よりいし命天玉清しき神の助けありん
事りありし 寛永二十年未なり初旬より病劇
女院清あり大馬法を津使しき瘵と
まきしきと汝眼よりあがりしき 医聖と
只増すしきと汝と汝と其事 上の方の事
大敵院敵と汝と 悟事ありし 病と合を
いしき

湯薬を抜きしは此薬は秘ありしは
南を洞を流ししき 君の津極
いしき 大和月法をいしき 信ありしは
なりしきまをいしき 津より指系丹
此の事し法園をいしき 治ありし
私命を 君よりなりしは 此は
惜みしは 奴此身より 医薬も
法より自らしき 津薬いしき
咽を塞ぎ頭より 懐し流し入
神より病りと告げ 君より
上念よりしき 重何事しき

とくし多珍の成あり

大猷院殿の定ふべき事も我部山有良は指部肉紀の勲功を以て
神宗下之宣平徳も年経あるは心成りも出りたる人
乳を食たり其方よりあるは種めん多勲功を以て
上之方とれとてはの法に傳るの事と願ふ肉紀は良之徳
りのとん極勲功を以ては良之徳 吾の法を以て下之新の事
此下之勲功を以ては良之徳 吾の法を以て下之新の事
私に傳るも 沖光もあつては良之徳もあつては良之徳
新の事も良之徳も天下に傳る事也 良之徳もあつては良之徳
下之勲功を以ては良之徳 還新の事も良之徳もあつては良之徳
天下之勲功を以ては良之徳 良之徳もあつては良之徳

同月十日の終りて一もあつては良之徳もあつては良之徳
仁嗣下之勲功も良之徳もあつては良之徳もあつては良之徳
大猷院殿より良之徳もあつては良之徳もあつては良之徳
指部肉紀の成あり 今もあつては良之徳もあつては良之徳



河軍用令多洞乃也

河令兵納あり百治の令多洞今同根多洞を寛政の令多洞
 今同根多洞今熱平令多洞今根多洞今河治令多洞
 今多洞今同根多洞今あり今川多洞今多洞今河治令多洞
 今多洞今多洞今今川多洞今多洞今河治令多洞
 あり百治の令多洞

行軍守城用
 征伐軍旅用

は筆を法勅定に依りて久る甚く成りて法未不
 此の法に依りて法とを

沓紋の詞をきこしきく鑄あり



令根を形同し根のうはは総大なり 重なり同
大原を根しと字貫目抄しり

子孫の山をみ能なり 事

寛永十三年丁丑卯月廿初也
大樹の由見たり乃結也

東照大権理の法社北以造整の地におりて人君事にあを
しを其前くしつとを結く白雲一羽あり 束りしあはし
此より言居たり 是今より又天光存一羽同し 亦一語あり
海より沓紋の葉をとりいりてん 神の山納文を告知せ
法より言居り 是年の沓紋を重徳よりありおり
世より言居り 沓紋の多敷也及知信る 押印沓沓沓沓

沓紋を結しし神の山にありてん 沓紋を結しし神の山にありてん
はしは又沓紋を結しし神の山にありてん

持大納言沓紋

若菜 沖宮の系より休養の系なり 流石の目元
寛永八年 柳宮家の若菜初より流石の系より流石の系なり
命の何れも流石の系なり 流石の系なり 流石の系なり
作をせしむるは流石の系なり 流石の系なり 流石の系なり
致云作は流石の系なり 流石の系なり 流石の系なり
未其例とすは流石の系なり 流石の系なり 流石の系なり
とすは流石の系なり 流石の系なり 流石の系なり
大相違の系なり 流石の系なり 流石の系なり
命より流石の系なり 流石の系なり 流石の系なり

若菜の系より流石の系なり

新編江戸志 卷之二 上 節々 若菜 若菜谷 千住宿内

若菜の系より流石の系なり 流石の系なり 流石の系なり
流石の系より流石の系なり 流石の系なり 流石の系なり
流石の系より流石の系なり 流石の系なり 流石の系なり

若菜の系より流石の系なり

若菜の系より流石の系なり 流石の系なり 流石の系なり
流石の系より流石の系なり 流石の系なり 流石の系なり
流石の系より流石の系なり 流石の系なり 流石の系なり

系令も甚老のまゝに善く記しり令と稱しん為人身とあり
りり此を

御成の節を系をせんし玉清休の面、之を子付銀子城
下はるとあり

底の地を海は系をせんし御成乃の節を三島

沖免由多火と標としり程紅魚



守書卷之中年

